

# 今週のお薦めレコード



イギリス室内管のモーツァルト

このレコードを聴きたい

第8061番 税込み3300円



モーツァルト 交響曲第29、30、34番  
イギリス室内管/バレンボイム  
英EMI/ASD2806/1971年録音/G

イギリス室内管の結成趣旨がそもそもモーツァルトを主とした18世紀の作品演奏をすることだった。恐らく団員の多くは殆どのモーツァルト作品を暗譜しているだろう。勿論ウィーン・フィルの艶やかさは無いが、どのような指揮者による演奏にもしなやかに対応し、その指揮者の求めるモーツァルトの響きを創出して要求にこたえる。そうしたキメ細かな対応の出来る楽団は世界にこの楽団ひとつだろう。だから、ここに紹介するバレンボイムの演奏においても私たちの耳にはバレンボイムが生み出す響きと共に、イギリス室内管ならではの愛と喜びに溢れた表情を聴くことが出来るのだ。この頃のバレンボイムの大らかな音楽づくりも反映されている。(山田)

第8062番 税込み16500円



モーツァルト 交響曲第38番『プラハ』  
シューベルト 交響曲第8番『未完成』  
イギリス室内管/ブリテン  
英デッカ/SXL6539/1970-1年録音/G

ブリテンによる演奏は作品の如何を問わず、イギリス室内管のベストとして挙げられる。その演奏の最大の特徴は正直であることだ。言い換えれば飾りや誇大な見せかけなどには全く縁がない。彼の全感覚が集中した楽譜から生まれてくるものは混じり気の無い純粋な響きでありリズムであり歌でもある。未完成の始まり3分間を聴けばさらに納得できる。多くの指揮者に聴かれる“力み”や“伸縮”“無理なアクセント”などは全くなく、楽譜から飛び出した音が独り歩きしているようだ。それは他でもないシューベルト自身の一人歩きで、ブリテンの無垢な棒によって紡ぎ出された音楽なのだ。(山田)

第8063番 税込み1650円



モーツァルト ヴァイオリン協奏曲第2、5番  
スピヴァコフ(vn, 指揮)/イギリス室内管  
独エレクトローラ/1C063-03478/1978年録音/G

これはG.クレメールと覇を競ったスピヴァコフの個性が最もよく発揮された演奏である。今生れたばかりのような初々しい響きをヴァイオリンから紡ぎ出すことのできる才能は稀だ。モーツァルト演奏にかけては右に出る楽団の無いオーケストラの団員達も及びもつかない美音が惜しげもなく零れ落ちてくる。これは、かつてティボーのみが生み出し得た響きかも知れない。ティボーの場合はポルタメントも加えられて、より甘美に聴こえたが、スピヴァコフは純粋である。しかも、いかなる難技巧が加わった場面でも美しさはいささかも崩れない。これはレコード時代の最後期に残された数少ない名演奏の一つと言って良いだろう。(山田)

第8064番 税込み2200円



モーツァルト フルート協奏曲第1、2番  
ツェラー(fl)/イギリス室内管/クレー  
独グラモフォン/2530344/1974年録音/G

カラヤンの下、ベルリン・フィルで長年主席を務めていたことで人気の高いツェラーであるが、ソロ・レコードは意外に少なくこれは貴重品だ。すべての音域に渡ってむらの無い安定した響きで、細やかな装飾音も鮮やかに聴かせるツェラーはもっと聴かれて良い。このレコードはイギリス室内管の好サポートも加わって、ツェラーは思い切り羽ばたいている。クレーのアシストも自然でちょっとした隙間にもうまく入り込んでフォローしている。このレコードはソリストのツェラーのみならず全ての参加者が一体となって創り上げた見事なアンサンブルの成果である。言うまでもないが、協奏曲の本質と言うものはそこにあり、この演奏はそれを具現している。(山田)